

論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	金子 智紀
論文審査担当者	主 査	政策・メディア研究科委員	兼総合政策学部教授	井庭 崇
	副 査	政策・メディア研究科委員	兼環境情報学部教授	秋山 美紀
		政策・メディア研究科委員	兼総合政策学部教授	島津 明人
		健康マネジメント研究科教授	堀田 聡子	
学力確認担当者：				
金子智紀君の学位請求論文は「介護現場における「ともに生きるケア」の実現に向けた支援－「思考の補助具」としてのパターン・ランゲージの制作と導入－」と題するものである。本論文は、高齢者福祉施設における介護職員のよりよい実践を支援するために、よりよいケアに焦点を当てた省察を支援する「思考の補助具」を制作し、介護現場への「思考の補助具」への導入を通じて、その実践的な意義と活用の可能性を検討した力作である。 まず、よりよい実践を支援するための「思考の補助具」として、「ともに生きるケア」を実現している実践者たちが何を考え何を行っているのか、そして介護職員を支援するためには何を伝えれば良いのかを特定し、パターン・ランゲージの形式で記述した。これにより、介護職員のよりよい実践を支援する 30 のパターンが言語化された。制作されたパターンについて、現場からのフィードバックと、各パターンの実践状況の調査を通じて「思考の補助具」としての展開可能性を示した。 次に、介護職員のよりよい実践を支援するために、「思考の補助具」を用いて ①よい実践についての学びの支援、および、②よい実践に向けた目標設定の支援を、介護現場に実際に導入し、その効果と改善点を検討した。研究①の結果、パターンの内容を読むことで初心に立ち帰る気づきや「ともに生きるケア」へのモチベーションを高める意識の変化が得られること、そして事後アンケートからは、実践に役立てられることが確認された。また、他者の「ともに生きるケア」の実践から学ぶ際にパターンを用いて経験を語り合うことで、話題の焦点化や経験の言語化が促進され、さらには経験年数の差に関わらず効果的に学び取ることが示された。研究②の結果、パターンを用いて目標設定をすることは、個人やチーム、組織にとって、「ともに生きるケア」の目標設定をする際の思考の補助となり、計画が立てやすく、実践を振り返る際にも役立つことが確認できた。 論文の構成は以下のとおりである。 第 1 章では、日本における高齢化の進行に伴う介護施設の役割の変化と主題である「ともに生きるケア」への着目について述べ、研究の目的と方法、構成、そして研究者の立ち位置について述べた。 第 2 章では、よりよいケアに焦点を当てた省察を支援する道具の必要性について言及し、介護職員の省察を支援する「思考の補助具」としてパターン・ランゲージに着目し、介護現場における活用の可能性について論じた。 第 3 章では、「ともに生きるケア」を実現するために実践者が何を行っているのか、介護職員を支援するためには何を伝えればよいのかを特定し、パターン・ランゲージの				

形式で記述した。結果、「ともに生きるケア」を実現するためには、「自然に暮らせる居場所をつくる」、「地域・社会に根ざす」、「そばに居続ける」ことが重要であるということを特定し、実践を促す30のパターンを言語化した。

第4章では、制作されたパターンに対する現場での受容や実践状況を調査し、そのフィードバックをもとに「思考の補助具」としての展開可能性を示した。具体的には、介護職員がパターンをどのように捉え、実践に活かしているかを分析し、活用上の課題や改善点についても考察を行った。

第5章では、パターンの内容を読むことによる学びの支援について検討し、介護職員がパターンを通じて初心に立ち返る気づきや「ともに生きるケア」へのモチベーションを高める意識の変化が得られることを示した。また、事後アンケートの結果から、パターンが実践に活かされる可能性があることを確認した。

第6章では、パターン・ランゲージを用いた対話における気づきと学びの促進について検討し、パターンを活用することで話題の焦点化や経験の言語化が促されることを示した。本章は、原著論文「パターン・ランゲージを用いた対話における気づきと学び：高齢者ケア実践についてのコミュニケーション支援」（『ヒューマンインタフェース学会論文誌』，2024年2月，第26巻第1号，pp.51-62）を元に書かれたものである。

第7章では、介護現場におけるケアの経験共有を促す方法を検討し、パターン・ランゲージを用いたワークショップを通じて、経験年数に関わらず学びを深められる可能性を示した。本章は、「介護現場におけるケアの経験共有を促す方法の提案：ケア実践のパターン・カードを用いたワークショップ」（『対人援助学研究』，2023年10月，第14号，pp.72-84）を元に書かれたものである。

第8章では、「ともに生きるケア」のパターン・ランゲージを「思考の補助具」として用いることで、他事業所の実践事例から学び取る方法について検討した。特に、パターン・ランゲージが、実践者が共通の語彙を用いて具体的な事例を共有・分析することで、新たな学びを得ることができることを示した。

第9章では、個人の目標設定と実践支援の方法について検討し、パターン・ランゲージを活用することで、介護職員が自身の目標を明確にし、具体的な行動計画を策定するための支援が可能となることを示した。

第10章では、チームや組織単位での目標設定支援について検討し、パターン・ランゲージが共通の枠組みを提供することで、チーム内の協力を促し、組織全体での実践の質を向上させる可能性を示した。

第11章では、ケア実践の歴史的背景を振り返り、本研究が社会的・実践的に持つ意義を示すとともに、パターン・ランゲージの機能面についても考察を行い、その役割と可能性を論じた。

最終章である第12章では、本研究の成果を総括し、各部の主要な成果とその意義を整理した。あわせて、本研究の限界と今後の展望について述べ、介護現場における「ともに生きるケア」のさらなる発展に向けた方向性を示した。

本研究の意義は、高齢者福祉の分野におけるよりよいケアを実現するための新しい支援方法を考案・制作し、実際に現場に導入を試み、その効果の可能性を示した点にある。これは学術的な成果であるとともに、「ともに生きるケア」のパターン・ランゲージ

論文審査の要旨及び担当者

No.3

ジを介護職員がどのように活用可能なかを例示し、現場での活用への道を拓いたと言える。

本研究は、金子智紀君が介護現場における実践と研究を融合させ、具体的な支援策を開発・導入することで、高齢者福祉分野に貢献した成果を示すものである。特に、現場の実践者と協働しながらアクションリサーチの手法を用いた点は評価できる。

また、金子君の研究は、その学術的な意義のみならず、介護現場での実践的な活用が進んでいる点も注目に値する。彼の研究に基づいたパターン・ランゲージは全国の介護施設で用いられ始めており、今後さらに普及・展開が見込まれており、高齢者福祉分野の発展に寄与すると期待される。さらに、金子智紀君は、現場との信頼関係を築きながら研究を進める実践的な能力に優れ、その研究・実践活動は、いくつもの受賞や表彰によって社会的な評価も得ているということも特筆すべき点である。

以上より、審査委員一同は、本論文が当該分野の学術的発展に寄与する十分な成果をあげたものと判断し、金子智紀君が博士（政策・メディア）の学位を受けるに値すると認めた。